続・オカルト研対決日記

intruseSR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
続・オカルト研対決日記

【Ｎコード】
Ｎ００５５Ｋ

【作者名】
ｉｎｔｒｕｓｅＳＲ

【あらすじ】
イノセンスとの戦いは謎に包まれたまま終わり、そのことを気にせずもとの日常生活に戻ったオカルト研メンバーたち。
しかし彼らの日常自体が、もう普通ではなくなっていた――。

この話は「オカルト研対決日記」の続編です。なるべく読んでおいてください。
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６７９９ｉ／

それと、掲示板を始めたんで、よかったら利用してください。
ｈｔｔｐ：／／ｍｂ１．ｎｅｔ４ｕ．ｏｒｇ／ｂｂｓ／ｉｎｔｒｕｓｅ

作者とゴクエンが「オカルト研対決日記」を語る！

『始まりました！続・オカルト研対決日記！すごくないですか！続ですよ、続！』
「作者さん、はしゃぎすぎです…」
『君がゴクエンか。なかなかよさそうな子だね』
「そんなことはどうでもいいです。ではこれから俺日村竜馬と作者ｉｎｔｒｕｓｅＳＲが、オカルト研対決日記について語りたいと思います！」
『イエーイ！』
「ところで作者さん、他のオカルト研メンバーは？」
『ああ、そのことね。書くの面倒だから省いたわけさ。フッ』
「いや、全然カッコよくないっすよ。この章は、本編とはそんな関係ないので、『テメーらのふざけたトークなんか聞きたくねぇ』と言う方は読み飛ばしてください」
『失礼な。そんな人いるはずないだろ？』
「いや。現に他のオカルト研メンバーは、見る気はおろか出る気もないようだ」
『ふーんだ』
「かわいくないよ」
『まあ雑談はおいといて、』
「この章自体が雑談のかたまりなんだけどね」
『前作についてでも話そうか』
「無印についてですね」
『なんだその略し方は！』
「いやあポ〇モンとかス〇ランとか、シリーズ物の一番初めは『初代』だとか『無印』だとか言うじゃないですか」
『なるほど…。では無印について話そうか』
「では俺が質問して作者さんが答える、って形式にしましょうか」

『そうだな。どんとこい』
「ではQ1。この作品の舞台はどこでしょうか？」
『いきなりそんな質問か。ケータイ小説ごときにモデルなんていると思ってるのか？』
「ひでぇ！全ケータイ小説家に謝れ！」
『とはいえ、ちゃんとモデルはあるんだよ』
「もしや『自分は特別だ』みたいな流れで言おうとしていたな…」
『場所は埼玉県某所。私も埼玉に住んでいるんだが、私の家から少し離れた所にその地域がある』
「埼玉っていっても広すぎじゃないですか！何市かも教えてくださいよ！」
『うーん。仕方ない、言おう。さいたま市だ』
「ほほう、埼玉の中心ですね。なかなかいい所じゃないですか」
『うん、まあね。この話はここら辺で。次の質問にいこうか』
「なんか隠してそうだな…。まあいいや。Q2。ヒロインは誰？」
『この話には恋愛はいれない予定だ。苦い思い出があるからな…』
「例えば以前書いた恋愛小説が酷い出来だった、とか？」
『なぜだ！なぜお前はそんなにも的確にツッコむんだ！』
「だそうなので、『淡イ早春ノ　モノガタリ』で検索！」
『やめろ～！それだけはやめてぇ～！』
「ではQ3。登場人物の名前になにか工夫はありますか？」
『おう！その質問待ってたぜ！オカルトめいたことに陰陽五行説ってあるだろ？「木火土金水」ってやつ。あれをメインキャラにいれたんだよ』
「ふーん。『火』ってキャラがいないし、俺の名前にはなにもはいっていないし。もしやこれがなにかの鍵なのか！？例えば『火』のつく転校生が来るとか！？」
『いや。初めただ思いつかなかったから同じ読みの「日」を使っただけだ』
「手抜いてるよ！めっちゃ手抜いてるよこの人！」

『まあそんなもんだろ、どんな作家も』
「なんか自分と同じにしてるよ、他の作家のこと」
『次行こう！』
「しかたない。では無印についての最後の質問。ズバリ主題は？」
『くっ、難しい質問最後までとっときやがって！』
「答えてくださいよぉ、さ・く・しゃ・さん！」
『うーん、でも作品自体はまだ終わってないから、主題はまだあかせないってことで』
「なんか正論で逃げた…」
『じゃあ次は何を話そうか』
「続について話してください」
『今度は私一人で説明するよ』
「じゃあ少しずつ質問をいれていきますね」
『続オカルト研対決日記は、簡単に言うと短編集だな』
「つまり短い話を並べていく、ということですか？」
『短いといっても、一つの話で三章分くらい使うと思う。まあ中編小説集といったほうが適切だな』
「なるほど。では題名とかはどうなるんですか？」
『「第△話　○○編その□」って感じで通そうと思う』
「じゃあサブタイトルは？」
『廃止だな』
「そうですか」
『で、内容について。短編集とはいっても時間の軸はそのままなわけだから、当然日常生活が基本な訳です。そこにちょっとしたトラブルを混ぜて仕上げる、みたいな感じ』
「ほう。なんか面白そう」
『なんか質問は？』
「新キャラとか出るの？」
『それは秘密ということで』
「そう。ということはいるわけか…」

『これで話すことはないな』
「そうですね」
『では、ここまで読んでくださったみなさん、ありがとうございました。ではこれから本編を更新していこうと思うんでよろしくお願いします。それと、あらすじにもあるように掲示板を始めました。これは「小説家になろう」のＩＤ未登録の方や「作者と話したい」という人のために作りました。是非利用してください』
「利用する人なんかいないだろ」
『そういうこと言うな！ではまた会いましょう』

呪いのゲーム編その一　いつもの日常

九月。九月といえば二学期最初の月で、英語でいえばＳｅｐｔｅｍｂｅｒ、旧暦九月は確か長月とか呼ばれてたりする。
まあそんなことはどうでもいいんだが、九月って結構節目のようなきがするんだよな。夏休み明けってだけあって、夏と秋の間って感じ。それと秋分の日で一年の半分くらいって感じ。でもそういうのは人それぞれ違って、十月が夏と秋の間、だとか、冬至が一年の半分だ、だとか色々な考えがあるわけだ。まあ一年を会計年度で見るかどうか程度の差なんだろうけど。
そして二学期といえば、だ。二学期には十月に文化祭がある。これは楽しみだ。だってだってさ、自由にパァッとやれるんだぜ。これ以上の幸せがあるか？でもなぁ…。
「はぁ」
「おいどうしたゴクエン」
「ああマサちゃん。いや、別に」
こいつは正本雄二。小学校の頃から金子とともに仲のいい、親友だ。こいつは新聞部とやらで頑張ってるらしい。
「なあマサちゃん。男ってやっぱ顔だよなー」
「お前がそれ言うとスゲーむかつく」
「だよなー」
実際俺はかなりかっこいいのだ。結構もてるんだ。バレンタインとかやばいんだ。チョコ食いすぎて鼻血とかだしたこともあるのだ。
「でも、スポーツとか出来たらなおかっこいいよなー」
「だからお前は殴られたいのか」
そう、俺は運動神経もいいのだ。なんせ小学校の頃やってた少年野球のチームを全国大会へと導いたピッチャーだからな。まあその話はまた今度。
「しかも性格までよかったら最高だよなー」

ポコン。軽く殴られた。
さらに、俺は性格までいいのだ。後輩からは慕われ、同級生からは尊敬され、先輩からは可愛がられる、とても性格の良い学生なのだ。
それなのに。
「……それなのに」
「ん？どうした？」
「それなのにそれなのに」
「だからどうしたんだって！？」
「うるせぇ！あんな男のどこがいいんだ！」
正ちゃんは黙って考えていた。なんとなくチクタクという音が聞こえる。そして、チーンとなった。
「ああ振られたわけね」
「うるせぇ！つか告白してねぇ！」
覚えているだろうか。文化祭で告白しようと思ったこと。その子は夏休みに彼氏を作っていたのだ。しかも相手はルックス貧困、お肉たっぷり、そして空気的存在なのだ！あんな豚野郎のどこがいいというのだ！
「好みは人それぞれだからねー」
なんか慰めているように聞こえるが、正ちゃん必至に笑いこらえてる。
はーあ。何もかもが終わったみたいだ。もういっそ「秋休み症候群」にでもかかっちゃおうか。
秋休み症候群とは、元々は秋休みのない学校で、ずる休みで秋休みを作ることであったのだが、そこから転じて生徒が学校に対して行うストライキという意味になった言葉である。まあこの場合はただの「不登校」なんだろうけど。
ちなみにこの言葉、うちの学校でしか使われていないローカルな流行語なんで、他の学校の人には伝わらないかもしれない。
まあこの時は、その秋休み症候群がこの事件の発端になったなんて夢にも思わなかった。

キーンコーンカーンコーン。
鐘がなる。これから俺の、俺達の新しい日常がはじまる。

呪いのゲーム編その二　ちょっとした変化

例えばフィクション上における新聞部っていうのは、よくスキャンダルやでたらめな噂が書かれたりするんだが、少なくともうちの学校ではそんなものはない。うちの新聞部の新聞はまさに新聞である。とはいっても、見たことない人にはわからないだろう。どのような新聞なのかというと、つまりこうである。

たった一枚のプリントに、社会面、スポーツ面、コラム、政治面、番組表、そして四コマ漫画までもが綺麗に書かれているのである。あるところは新聞をバカでも分かるように要約し、あるところは生徒の興味をひく話題をとりあげ、そして四コマ漫画がかなり面白い。よって、とても人気なのである。

ここでフィクションみたく「それを俺のダチである正ちゃんが一人でこなしているのだ」なんてはいったらかっこいいのだが、そんなわけはない。

ただ、アイツは確かに重要な役なのだ。なぜなら、新聞の人気の一つに「字がはっきりしてて読みやすい」という理由があるのだが、その字を書いているのがまさしく正ちゃんなのだ。正ちゃんはとても字が上手い。なんでも、母親が書道家だとか。最後に書道関連で聞いたのが、「やっと五段とれたよ」。あれは小学校の頃だったろうか。最近では特待生がどうのこうのと、全くわけの分からない話をしてくる。

で、秋になると決まってでるのが「最近学校を休む生徒が増えています」という記事。無論秋休み症候群のことだ。なんでも症候群とつけるのはちょっといやだが（雛〇沢症候群、サ〇エさん症候群ｅｔｃ）実際うちの学校ではかなり深刻な問題だ。たとえば誰か一人が仮に風邪でやすんだとしても、「〇〇さん秋休み症候群発症したのね。わたしもやっちゃおうかしら」的な会話が広がり、次々と休むのである。

しかし、だ。その結束力はあくまで一グループ内であるため、最小3人程度の被害で済む。そのため学校側は全く気づかないのである。また、秋休み症候群が二学期に起こることにも気づかない理由がある。何せ二学期は長いのだ。よってグループ別に発症する時期がずれることがとてもよくある。これでさらに分かりにくいわけだ。
と、秋休み症候群についてこう長く話してきたが、なぜ説明していたのか。
それは、ついに始まったからだ。
とうとう一人目の発症者がでた。石原恭子。勉強面から見ても、運動面から見ても平凡な、ルックス的にもそこまで秀でてはいない普通な女子である。
というわけで、秋休み症候群の伝染劇が始まった。

かれこれ三日たった。休み五人。だいぶ広がってきた。
秋休み症候群の症例としては、ただ単に家でのんびりすごすことである。大抵一週間すれば学校にくるようになる。まあそんな感じ。
そりゃ俺みたいに勉強できるヤツは休んでも問題ないんだが、バカが休んじゃまずいんじゃないか？
まあそんなこと知ったこっちゃないが、一体休むのにどう嘘をつくのだろうか？ちょっと頭いたい？気分悪い？学校にいきたくない？…意外と簡単だな。
と、んなこと考えているうちに授業が終わり、久々のオカルト研の活動日だ。会議と書いて雑談と読む、そんな活動だ。
デュララララ、間違えた、ガラガラガラとドアをスライドさせる。
「お前一瞬そのドアで池袋に行こうとしてなかったか？それはどこでもドアじゃないぞ」
そうツッコんでくれたのは土門晋三。見た目不良でマジ怖いが、最近は仲良くなってきた。

「せめてggggくらいにしなさいよ」
長編ラブコメ風にドアを開けろ、と言ったのが水嶋諒子。簡単に言えば元気な女の子である。
「…にぱー…醤油をもらいにきたのです…」
今死亡フラグを踏んだのは木田友江。無口で読書家、というありがちな設定だが、読む本が非常にまずいのである。さっきチラッと見えたのだが、そこはバラバラ遺体の処理シーンだった。なぜか関節を押さえてしまう自分も少し怖い。
「あれ、そういえばかみ…」
「だから神山君は夏休み終盤に転校しちゃったんだって」
「…ああそうか。うん」
やっぱり俺は、七月前半までの楽しかった日々は、たとえ相手が敵でも忘れることは出来ないのかもしれない。
「ん？そういえば金子は？」
「ああ、なんか用事があるらしい」
「ふーん」
「なんか嬉しそうだったよね」
水嶋が言う。嬉しそうってなにがだろう。
「…かの…じょ…？」
『何だってぇぇぇ！？』
木田があまりにもおかしなことを言うので、つい驚いてしまった。
「…断定はできない…ヨ☆……このキャラ付けは失敗と…」
なんだか作者は作者で苦労しているようだ。
「でも確かに最近あいつうかれてるよな」
「そういえば。だから最近アンタは正本君とつるんでるわけだ」
「いや、そういうわけじゃないんだがな」
「ふーん。まあいいや。明日金子に問い詰めない？」
「名案だね」
「面白そうじゃねーか」
「…興味あるでござる……これも駄目っと」

なんか決まったな。
「よし、作戦会議だ！」
『オーッ！』
しかし金子はこの日からしばらく学校にこなくなってしまった。

呪いのゲーム編その三　解決の糸口

金子が休み始めて一週間がたった。今まで休んでいた人も学校に来るようになっていて、金子だけが休んでいるという状態になっていた。
最初は風邪かなにかと踏んでいた。あんな元気なヤツに休む理由なんてないと思っていた。
そして俺達オカルト研メンバーは金子の家に訪ねた。
「金子君大丈夫ですか」
俺達がそう聞くと金子のお母さんがこう言った。
「どうして不登校になっちゃったのかしら」
どうやら金子が休んでいた理由は秋休み症候群なんかじゃなかったらしい。
不登校の間にどんな生活をしているのかと聞くと、大半は寝ている、そうお母さんがいった。
「そしていつも夜中に動き始めるの」
まるで夜行性だ、そう思った。
そんなこんなで一週間がたったのだ。
しかし、今日試しに金子に電話した時、一つ分かったことがあった。
「もしもし」
「チッ」
そんな会話だった。どうやら嫌われているらしい。ガクリ。
しかしその会話の中に、気になる音が入っていた。
某ゲーム機の起動音。
つまり、だ。金子は学校を休んでいる間にゲームをやっている、と。
そして最近一つの都市伝説を聞くようになった。
「で、その気になる都市伝説を詳しく教えてくれよ」

そう俺は水嶋に聞いた。
「『呪いのゲーム』っていうものなんだけどね」
「結局オカルトに持っていくのか」
「うるさいわね。で、そのゲームをプレイするとゲームの世界に入っちゃうんだって」
「いや、金子に電話繋がったけど」
「うーん、なんて言うかね、ケータイやら所持品やらもった状態でゲームの世界に入るらしいのよ」
「で、ゲームの内容は？」
「ＲＰＧっていうかアクションっていうか。まあロッ〇マンの世界にドラ〇エの主人公が入ったみたいな？」
「なるほど。いやしかしだなぁ、そのゲームはどこにあるんだよ」
「学校の近くにゲーム屋あるでしょ。あそこの裏に時々置いてあるんだって」
「ようするに裏路地に落ちてるってわけか」
「そうそう」
「なんか俺は興味あるぜ」
土門がたちあがってそう言った。
「…私もあるでーす……絶対に合わない」
木田はいまだにキャラ設定が決まらないようだ。
「んじゃあ俺んちでやってみるか」
『おー！』

その日裏路地にそのゲームは置いていなかった。
「やっぱり嘘かよ」
「今日はないだけよ、きっと」
「明日も来ようぜ」
「しかたない、そうするか」

本当は次の日もなくて、そういうのが何回か続いてやっと見つかるっていうのがセオリーだが、次の日にあっさり見つかってしまったので、なんか嫌な予感がしてしまったのは俺だけじゃないはず。その日俺らはゲームを起動した。そのゲームはとんでもないクソゲーだった。しかし全クリした後に俺らは不意に意識をなくしていった。

呪いのゲーム編終章　想定内の衝撃

サブリミナル効果、という物を知っているだろうか。ある映像のコマの中にまったく別の画像を入れることで、その画像に伴った行動をしてしまうことである。まあ今の科学では１００％の可能性は証明されていない。でもまれにそれが成功してしまい、洗脳という過程を通って事件に巻き込まれる人もいるそうだ。
それは誰だ？
俺らだ。
でもそのときはそんなことは全く考えていなかったのだけれど。

「まさか本当に成功するとはな……」
どこかからそんな声がした。その声で俺は目が覚めた。
ここはどこだろうか？
一見古い山小屋の様に見えるが、ＲＰＧの宿って感じもする。まさか本当にゲームの中に入ってしまったのだろうか？
「…おお、日村。俺達は一体…」
「土門か」
どうやらみんな同じ部屋にいるらしい。
「おい木田、水嶋、起きろ」
「ん、もうすこし…って、ここどこ！？」
「……」
まあみんな初めに受けた印象は同じようだ。
「わからん。まさか本当にゲームの中に入っちゃったのかもな」
「あ、一つ聞いていい？」
「なんだ」
「服装のことなんだけど…」

自分の服装を見てみた。
「すげぇ！鎧じゃねーか！」
なんと気づかぬうちに鎧を着ていた。本当にゲームの中なのか！
「…プラスチック製」
「へ？」
ちょっと叩いてみる。コツコツ。…すげえ軽い音だ…。
「まああんたの服はどうでもいいの。なぜに私はバニーガールなの？」
「ＲＰＧって言ったら仲間の女キャラの洋服以外に楽しみなんてないじゃないか」
「ふーん、そういうもんかねぇ」
ちょっと待て。普通そこは『なによこの変態』的な受け答えがほしいのだが。
「でも、こういうの着てみたかったのよね」
「まあそんなことはどうでもいい。よく見ると俺の防具の下、普通の私服だ」
「ようするにＲＰＧゲームに入る前の服に防具をつけただけ、ってことか？」
「いや、これは誘拐だな」
『誘拐！？』
「うんそうだ」
そのときだった。
「はーい君達。大人しくしないと痛い目見るわよん」
敵登場。
とりあえず武装をみてみよう。
相手：ナイフ、スタンガン×３人
こっち：プラスチックの手抜き防具、腰についてるおもちゃ（？）の剣×２人
……。
勝てる気がしねえ。というよりもこのシチュエーションはなんなん

だ！
どんどん相手が迫ってくる。これはやばい、マジで死ぬかも。
その時だった。
「アースクエイクバスター！」
誰だ、今格ゲーの必殺技みたいなの使った奴！
土門だった。忘れていたよ、彼が恐ろしく強いこと。
「な、なんだよアイツ！」
彼の蹴り（？）で一人が壁にぶつかりぺちゃんこになった。…ああ、グロい。
その調子で土門はもう一人にも蹴りをいれる。
しかしその時、最後の一人が土門を除いた俺ら三人の方に襲い掛かってきたのだ！
「シネェ！」
ヤバい。このままだとマジでヤバい！
だが、不意に水嶋が俺のおもちゃの刀を取って立ち上がったのは想定外のできごとだった。

俺金子が学校を休んだ理由。それは不覚にもゲームにハマってしまったからである。
その程度で、と思う人もいるだろうが、実際こういうことで不登校になる人はとても多いらしい。
まあ最近巷で話題になってる呪いのゲームとやらとは一切関係ない。
そんなゲームはやる気しないし。
もちろん、自分の小遣いだけじゃ不登校になるほどゲームは買えない。
だから、ちょくちょく親の財布から金を盗んでいる。
その日もいつも通り夜中に起きて、母の財布を開けているところだ

った。
いつもならばサツを一枚とって終わりだった。しかし、今日はなんとなく小銭も少し取ろうと考え、ポケットを開けた。その時だった。一枚のカードが落ちたのだ。ただのクレジットカードとかだったらまだマシだっただろう。
「こ、これは……」
自然に涙があふれてきた。

「み、水嶋？」
「いいからだまって見てなさい」
水嶋は何をする気なんだ！？
「シネェ！」
奴はどんどん近づいてくる。
すると水嶋は中段の構えをとった。
まさか、と思ったがやっと思い出した。水嶋は小学校の頃剣道やってたんだ。
俺も少し剣道をかじったことがあるからすぐに分かった。水嶋はかなりデキる！
「剣道三倍段って知ってるか！」
「なにを言う！それはめ○かボックスの負けパターンじゃねーか！」
奴がナイフを振り上げた。しかし、だ。
「違う！これはバ○ブレードの勝ちパターンだ！」
そして彼女の突きは綺麗に相手の喉をついた。
「アト○ックファイヤーブレード…」
コイツ、人殺す気か！

「お、そっちも片付いたみたいだな」
手を真っ赤にした（無論相手の血である）土門が近づいてきた。
「ひゃあ！」
思わずそんな声が出てしまった。凄い怖いぞ、コイツ。
「さて、これからどうするかだ」
そういいながら、一番生きてそうな奴を選び、事情聴取を始めた。
「きゃあ！すいませんすいません！言います言います！」
ここでやっと、サブリミナル効果で洗脳したことを白状した。
そしてまた、犯行は俺らが初めてだったことも一緒に分かった。
「結局金子はこんなゲームに手をだしてなかったのね」
「まあそうだよな」
仕方ない。また明日からせっせと活動しなきゃな。

それでまあ、あの呪いのゲーム（笑）の製作者三人は自首し、俺らもケータイのＧＰＳでなんとか帰ることができ、上辺だけでは一件落着した。
でもまだ、やることは残っている。
そんなことを考えながら登校していると、後ろから声がした。
「ゴクエーン、先に行っちゃうなんてひどいよー！」
「か、金子か？」
「ったく、この僕をおいていくなんてどういうつもりだい？」
「やっと登校できるようになったか！もうゲームなんてすんなよ！」
「ああ分かってるって」
カマをかけてみたが、やっぱりゲームだったらしい。ったく、ホント心配させやがってなあ。
まあこんなことは想定内の出来事なんでそこまで驚きはしなかった。
でもまあ、要所要所に衝撃は混じってしまうようで、俺は次の台詞

を聞いたときには怒り狂って暴れていた。そう思う。よく覚えていないが。

やっぱりゴクエン。俺のことはなんでも分かっちゃうんだよな。まさか俺がゲームやってたことまで分かるとは、な。
そして僕は言った。
「もうエロゲになんか手を出さないよ」
しかし次の瞬間ゴクエンは大声で『ふざけるなぁぁぁ！！』と叫んだ。次に暴れた。道端に咲いていたカントウタンポポを踏んだ。
「ゴクエン暴れんなよ。貴重なカントウタンポポふんじゃだめだろ」
「うるせぇうるせぇうるせぇ！」
そんなこんなでゴクエンをとめるのに数十分かかった。でも一体なぜおこっているのだろう？

それにしても、やっぱり普通の日常ってのは良いもんだ。こんな日々がずっと続けば良いのに、と本気で思う。
いや、僕は普通の日常を過ごしていく義務がある。
なぜって？
それが母親を宗教にハメてしまった僕の罪を、一生をかけて償う唯一の方法なのだから。

呪いのゲーム編終章　想定内の衝撃（後書き）

アトガキ。
はい、こんにちは。ｉｎｔｒｕｓｅＳＲです。
今回の「呪いのゲーム編」、楽しんで頂けたでしょうか。
このお話は、元々別の設定で作った短編だったんですが、このオカルト研でもいけるかな、と思ってやってみました。
感想とか、書いてくれると嬉しいです。
次の編は、おそらく土門中心の話になると思いますので、よろしくお願いします。
では、また次会う日まで。

とあるＵＳＢメモリの記録【赤】

１９９６年１月某日。日光で一つの爆破事件が起きた。
世間的には「迷宮入り」という形で処理されたこの事件は、犠牲者をたった一人しか出さず、その犠牲者には身寄りがいなかったことから重くは扱われなかった。われわれからすれば、ターゲットを的確に射抜けたことほど幸いなことはない。この結果は実に良かった。しかし、ここではまだ気づかなかったが、ターゲットはたった一人の少年に大切な情報をもらした。ターゲットにとってはこれが最後の罪にして最大の罪だった。
ただ問題の少年自体はそのことの重要性に全く気づいていないことから、処分については後日で良いと思われる。もしもここでただの平民にもらしていたのならこちらも気が楽だっただろう。殺すならすぐに殺せた。しかしその子供が我々の――
〈中略〉
よって２００７年７月より、日村竜馬及びその関係者抹殺、「ＰＲＯＪＥＣＴα」を実行する。
以下にメンバーを記載する。
隊長：――
〈後略〉

時空の石像編その一　不良少年の思い

誰にでもやり直したい過去や、ひきずっている思い出があるはずだ。しかし終わってしまったことなど悔いたって仕方がない。でも人間は、そんな過去を脱ぎ捨てることなんてできない。それを背負ってなきゃ生きてはいけない。

それが、そんな思い出を作った人類に与えられた使命なのだから。

そしてここにもまた、そんな黒き過去を持った少年がいた。

「お、土門。おはよ」

「日村か。おはよう」

そう挨拶を交わしたのは、おはようという言葉に似合わない放課後。オカルト研の活動時間だ。

「今日は全員来ているな。よし、じゃあ始めるぞ」

そう言ったのはオカルト研部長である日村竜馬。容姿、学力、スポーツと学校生活においてリーダーと呼ぶにふさわしい、模範の生徒だ。

「今日は何についての会議なの？」

そう水嶋が聞く。

「雑だ…いや、今日は最近話題になってる『時空の石像』とやらだ」

「ねえ、一番初めに『雑談』と言おうとしたのは私の気のせいかしら」

「…私も聞こえた」

木田が久しぶりに口を開く。どうやらキャラ設定については（筆者が）諦めたようだ。

「まあそんなことは良いけどよお、その時空の石像ってなんだよ」

オカルト研で最も饒舌な金子が興味を示した。彼は数日前にイザコザがあったというもののそこまで心を痛めたわけではなさそうだ。

「じゃあ説明するぞ。…つまりだな、ファンタジーみたいに、触れれば過去に戻ったり未来に行けちゃったりする、凄い石像なのだ☆」
『ウゲェ…』
「うん？みんななんでそんなに気持ち悪そうなんだ？」
日村、最後の☆はなんなんだよ…。
「ってなわけで、自分の人生の中で、罪を犯した経験を懺悔すべし！！」
「おお、なんか面白そうだぞ！」
「結構みんなの話に興味あるわ」
「…やりましょう」
ふふ、みんな日村に乗せられてやがる。上手くアイツは雑談にもっていくよな。
「そうだな、じゃあ始めようか」
俺、土門晋三は、このオカルト研が好きだ。

小学校の時の話だ。俺は偶然いじめを見かけた。いじめっ子は自分よりも二つほど年上だった。少し怖かったが、俺は構わず立ち向かった。
初めはいじめられていた子を守るくらいことさえできれば、と思っていた。が、次々といじめっ子を倒していった。その時自分は強いんだ、と思った。そして、人を殴り、蹴り、ぶっ飛ばすことに快感を得た。その後、いじめられっ子は俺が怖くなったのか、すぐに逃げていった。
それからというもの、いじめっ子を見つけるとそれを口実にぶっ飛ばしていった。今まで何も楽しいことがなかった灰色の世界に、たくさんの花が咲いたような気分だった。でも、その時咲いていたのは、ただの花ではなく、たっぷりと毒を含んだ汚れた花であったのだ。

日に日に学校内では些細ないじめすらなくなっていった。「いじめると呪いの怪物が現れる」、などという都市伝説がたつようになっていたからだ。自分が都市伝説にまでなったのは本当に気持ちが良かった。怪物、それこそが俺にふさわしい名だ、そう思っていた。しかしいじめがなくなって俺は正当に暴力が奮えなくなってしまった。今まで快感だったぶん、それがなくなって息苦しくなっていった。

ちょうどその時、近くに荒れた中学がある、ということでそこに行った。そこには俺みたいな人間がわんさかいた。その時に俺はみてしまった。俺のようにいじめという口実で暴力をふるう人間を。ひどく怖かった。自分があんなことをしていたなんて。端から見れば本当に怪物だ。俺は恐れた。ただひたすらに怖かったんだ。

少したった後、俺は数少ない友達に野球を誘われた。お前の筋肉量なら凄い選手になれる、といわれた。試しに練習を受けてみた。そうしたら監督にとても気に入られた。

結局俺は野球チームに入団した。これなら全国大会も夢じゃない、そう言われた。

実際野球は楽しかった。俺はピッチャーとして出場していたのだが、とにかく、キャッチャーのミットにボールという武器を当てることは、喧嘩と同じくらい面白かった。そして県大会決勝。相手チームには、凄く上手いエースがいた。ソイツは容姿も良くて、勉強もできるらしい、いわば模範の人間だった。

そして俺は、ソイツに負けた。本当にソイツは強かった。人間性としても、一選手としても。

俺はその時、初めて人間らしい感情をいだいたのだと思う。きっと俺はその時から怪物ではなく、人間になれたのだとおもった。

だが、問題が発生した。俺のチームのＯＢが、何を思ったか相手ピッチャーを半殺しにしようというのだ。

そしてそのＯＢというのが、あの荒れた中学のあの男だったのだ。

みんなはむかえるわけもなく、逆に乗り気な奴も現れ、そのピッチ

ャーを呼び出した。
そのピッチャーは喧嘩に強かった。チームの半分はすぐにやられてしまった。
しかし、ＯＢは容赦せずに殴った。
ピッチャーはかなりの怪我を負ったもののいつまでもいつまでも立ち向かっていった。
ＯＢは言う。
「あとはお前がやれ。本気でやれよ」
俺はその人が怖かったから、本気でやった。ピッチャーは強かったけど、俺には及ばなかった。
それでもなお、ソイツは立ち上がり続けた。そしてこう言った。
「例え愚かな選択肢を選んだとしても、俺は後悔などしない。その後死んだとしてもな！」
それがソイツの最後の言葉だった。
結局ソイツは階段から落ちた、などと嘘をつき、俺らにとっても、ソイツのチームにとっても害のない選択をとった。きっとそれは正しくない選択肢だっただろうが、俺は思う。それが日村竜馬そのものなんだと。
入学して同じ学校だったと気づいた時は驚いた。だが、日村自体はそのことは全く覚えていないようだった。よくわからないやつらに殴られた、程度の記憶だったのには少々驚いた。
日村は危なっかしい生き方をしている。誰か守らなきゃいけない。
それをできるのはだれだ？決まっているだろう、俺だ。だから俺は、学生の間だけでも日村のことを守ってやろう、そう決めた。

もちろんそのことをみんなに話す気はない。俺の心の片隅にとどめておくだけさ。テキトーな話でその場は終わった。
ただ、時空の石像にはなにか惹かれるものを感じていたのは、これ

から起こる何かを暗示していたからだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0055k/

続・オカルト研対決日記

2010年10月10日01時12分発行